

# 闻 名 仙 教

第 185 号 毎月発行  
(発行日) 2026 年 2 月 1 日  
発行所 : 真宗大谷派念佛寺  
〒 663-8113 西宮市甲子園  
口 2 丁目 7-20  
JR 甲子園口駅下車歩 4 分  
電話 (0798・63・4488)  
(発行人) 土井紀明  
<http://nenbutsuji.info/>  
アドレス nenbutsuji6@gmail.com  
ゆうちょ銀行(ドイノリアキ)  
記号・番号 17810-7-259431

## 《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉 每月 22 日 午後 2 時始  
(8 月は休みます)
  - 〈念佛座談会〉 8 月は休み  
毎月 12 日午後 3 時始
  - 〈「聞名の会」法話・座談〉  
毎月 6 日午後 7 時始
  - 〈真宗入門講座〉(副住職担当)  
毎月 18 日午後 6 時 30 分始

親鸞聖人を「如來の來現」と申し上げることがあります。これは聖人を尊ぶあまり申し上げるのでありますから、別に批評がましいことをいうべきではありませんが、よく考えないと、聖人に対するヒイキのヒキタオシになりかねないのです。

よく世間では、聖人に関する伝説の中に奇蹟的な話でもあると、すぐにそれをとらえて「聖人はタダビトではない」とか、「如来の化身である」とか言うのであります。これは聖人を尊んでいることに間違いはありませんが、その尊び方のピントがはずれてしまうために、却つて聖人の真価を隠すことになると思います。

を隠すことになると思ひます。すべて奇蹟的なことをかつぎ出すと、親鸞以上の奇蹟を現わした人は、古来の高僧の中に数多くあることと思ひます。そうなると、如來の來現ということは、親鸞以外の高

# 如來の來現

佐々木蓮麿

私が、親鸞聖人を如来の実現であるとするのは、不思議な奇蹟を現わされたからではなく、人間親鸞としては言えないこと、即ち如來如實の言を説かれたからであると見るので、これが最もふさわしい

なく、人間親鸞としては言え  
ないこと、即ち如来如実の言  
を説かれたからであると見る  
ので、これが最もふさわしい  
見方ではないかと思います。  
かように申すと、他宗からは

ようが、私は親鸞聖人が人間の本性をあばき人間救済の最後の切り札を示して下されたことは、どう考えても人間親鸞の仕事とは考えられないのです。

人間を如実に知ることは、  
人間ではできません。なんと  
なれば、いかに知つたと言つ  
ても、知るこころを知ること  
はできませんから、将来、人  
間の知識は驚くほど進むでし  
ょうが、依然として分からぬ

ものは、何と言つても人間の心そのものであります。これ

よう。この人間の盲点を破つて人間本来の姿を明確に示して下された親鸞聖人の教えは、

どう考へて人間親鸞の胸から現れたものではなく、如来の世界から「聞」の道を通して、人間世界に現わされて下された

如来如実の教えと仰ぐほかはありません。

親鸞聖人は「善導ひとり仏の正意を明らかにす」と言い、また聖徳太子を觀音菩薩と拝み、法然上人を勢至菩薩と崇めておられたのも、おそらくは人間的な尊敬を超えて、如来の顯現として拝んで行かれ

間否定から築き上げられる教  
学でなくてはなりません。蓮  
如上人は親鸞聖人の御一流は  
「阿弥陀如來の御<sup>おんおきて</sup>擬」であ  
るとも、また「仏法は法の威  
力にてなるなり、威力なくて  
はなるべからず」とも断言さ  
れました。  
(了)

春季彼岸会  
月二十二日(日)  
午後二時始まり  
念佛寺住職  
法話



ともしがたい壁にぶつかつて苦しんだからでした。

そういう意味で聖道門の

教えはあるべき人間の姿を  
教え、どういう生き方が真  
実の生き方であるかを教え、  
それを求めよと勧める教え  
です。それで、それがあつて、  
我が身の愚かさ、無力さ、  
煩惱の深さがかえつて知ら  
されるのです。ですから聖  
道門の教えは大事なのです。

法然聖人と同じ道をたどつてゐることになるのです。眞実の人生の依り処、本当の安らぎ、まことのアミダ仏を求めようと励んでみるのです。このような念佛聞法の生活を通して「出離の縁なく、助からぬ私」であると実感されてくるのです。

がどう扱われるかをいつも気にするようになりますから、権力者に縛られた人です。金銭や財産に必要以上に依存する人は貧乏になることを恐れますから「お金の奴隸」のようになります。健康に過度に依存し「健康が第一だ」という人はいつも病気を怖れ、病気になることや病気が悪化することが不安になります。これは「健康」ということに束縛されているのです。

そしてここでこうした独立者になろうとすれば、まづ「生死厳頭に立在すべきなり」で、縁があればいつでも死ぬ身であることを自覚することが大事だといわれるのです。

貧窮を怖れるのも病気を怖れるのも権力者を怖れるのも、結局は「死への怖れ」が元です。死をいつでも受容して安んじて死んでいくようにしておく。そこで、「殺戮餓死さつりくが死、固もとより覺悟の事たるべし。」で、いつ殺されようとも食えなくなつてのたれ死にしようとも、それはもう覺悟の上であれと清沢師はいわれるのです。

そして、生活問題（食えなくなるという不安）について清沢師は、いよいよ財物が乏しくなりしかも家族があれば、まず自分の家族に衣食を先に与え、その残りで自分を養いなさいといわれる。では家族を養う責任である自分が死んだら、残された家族の生きる糧はどうしたらよいか、といえば、それは如来（絶対他力）にまかせなさい、如来が良

きようにしてくださる、そういう信仰を持ちなさい、と勧められるのでしょうか。あの偉大なソクラテスは、自分が国家（アテナイ）の命令によつて、辺境の地であるセサリー（テッサリア）に赴任せねばならなくなつたとき、神の計らいによつて、他の人たちに自分の家族の世話をさせて養つてくださつた。私はこれから遠い邦（死後）に行くことになつたが、どうして神は残された家族を養つてくださらないことがあろうかと、神を信頼してこの世を終つていつた。

そしてそれでも家族が衣食を得られなかつて家族が餓死するとしても、それは如来のはからいであるから、これを甘んじて受け入れるべきである、といわれるのです。

こういうのが清沢師の生死観です。そして生きるも死ぬるも「如來のはからいである」という信仰を持ちなさいといわれ、如來他力を信じて生死の問題、生活不安の問題を解決しなさいと勧められるのであります。

このような清沢満之師の言葉をどう受け取るかということですが、まず人間はこの世の富や身体や権力などを頼りにし依存すると、それらによつて縛られ、おびえ、不安が起こつて止まないという点は、実際の自分が人生を考えれば、その通りで不安だらけです。様々なものに執着しているがゆえに、それらによつて束縛され<sup>けぼく</sup>ている、いわゆる「繫縛の凡夫」が私の姿であることは間違ひが無い。

ではその執着を断ち切り、この世の都合良いものに依存する心をなくすることができるかといふと、それができない。だからいつまでも阿羅漢のような独立者はなれず怖れおののいている生死の凡夫、それが私であります。この清沢師の言葉に照らされると自分は不安だらけの愚かな凡夫だと逆に知られます。

すでに今ここに私を受け取つてくださつてゐる。不安を始末することができない、そのような私にアミダ仏は「そんなお前だから私は今お前を摂め取つてゐる」と、今こここの私と共にいてくださるのであります。

この「アミダ仏が私とともに居てくださる。抱いていてくださる」ことをお知らせくださるのが南無阿弥陀仏です。南無阿弥陀仏は不安ばかりで不安が取れなつていることを知らせてくださるのがお念佛なのです。この南無阿弥陀仏を聞くと、「汝の生きるも死ぬるも私のいのちの手の中なのだよ」と知らせてくださる。いわゆる生死（生まれて死ぬ）そのものがアミダ仏の大きいなる大悲のいのちの中のいとなみであると、ほのかであるが知らされるのです。たとえ、餓死せねばならなくなつても、この大悲のいのちの中でこの世の生を終らせていただくのです。一生、不安煩惱はなくなりません。不安があるまま、

その不安がお念仏を申させ  
てくださることよなき縁となる  
のです。このお念仏を称  
え聞いていくことは、不安  
な人生の底で、アミダ阿弥  
陀仏のいのちのふところ住  
まいにしてくださるのであ  
ります。

# 信心夜話

弥陀の本願を信じる人は「摄取不捨の利益」をいただくのだと『歎異抄』第二章に説かれていますが、摄取不捨の利益の中身は、「人が一人」と知らせていたは、それが真実の宗教であれば、神と人、仏と人が、別でありつつ一つであるということを本当に知ることができます。

ダ仏と人の交わりがより親しくなつていくからであります。松並さんの念仏生活を聞くとそれが実証されていると感じます。（了）

# 住職雜感

この一月に衆議院解散、二月の選挙で騒がしくなつてきた。最近、驚くことの一つに、私の20代ごろは、若い人で保守党に票を入れるような人は大変少なく、逆に中高年は圧倒的に保守党に票を投じていた。ところが最近は逆で、高齢者はむしろ革新系に票を投じる人が多く、二十・三十代は圧倒的に今の保守党支持といわれている。なぜかよく分からぬ。日本を経済的にも軍事的にも強い国にするというのが今のが政府与党の考え方だという。そうなるとお隣りの韓国や台湾のように徴兵制にしなくては予算を増やすだけでは無理であり、今後の日本の若者は兵役につく可能性が十分あり得る。戦争には勝者も敗者もない。どちらも大きなダメージをうけ悲惨である。防衛は大事であるが、戦争に勝つ力を持つことよりも、「共に平和に生きる」思想・信念を世界に広めていくことが一番大事だと思う。

## 住職雜感